



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第86号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Description	事務局：北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2017-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73652
Type	journal
File Information	DRFmonthly_86.pdf





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第 86 号

No.86 March, 2017

【レポート】北海道大学 オープンサイエンスワークショップ

【レポート】第3回 SPARC Japan セミナー2016

【特集】オープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）第1回総会

【連載】今そこにあるオープンアクセス 第22回

最終号じゃ



【レポート】北海道大学 オープンサイエンスワークショップ

北海道大学附属図書館は、今年度を「北海道大学オープンサイエンス元年」と位置づけ、同大学の研究戦略室・大学力強化推進本部・高等教育推進機構高等教育研修センターとの共催で、年3回のオープンサイエンスに関するワークショップを開催しています。

その第3回目となるワークショップが、2017年2月7日に同大学で開催されました。

今回は「北海道大学におけるオープンサイエンスの状況と展望」と題して、3つの講演とパネルディスカッションが行われました。

【講演1】

『オープンサイエンスを加速する情報基盤整備の展望』

高井 昌彰 氏

（北海道大学情報基盤センター）



オープンサイエンスの実現には、研究成果とそのデータ（ソフト面）、それらを公開するための基盤（ハード面）の2種が必要となります。

高井氏の講演では、基盤整備を行う立場から、今後オープンサイエンスを推進するために必要となる基盤について、説明がなされました。

まず、文部科学省研究振興局科学官と国立情報学研究所（以下、NII）所長を幹事とする“大学の情報環境のあり方検討会”という有識者会議があること、その検討会の下にオープンサイエンス対応WGがあることが述べられました。この検討会で大学同士の情報共有が行われており、オープンサイエンス実現の障壁としてどのような問題があって、どのような政策を国に期待するかなどのやりとりが行われているとのことでした。

続いて、研究データの公開においては機密

性・完全性・可用性の維持が求められること、そのための研究データ基盤をどのように作るか、ということが述べられました。一口に研究データ基盤といっても、その中には管理・公開・検索の3要素があり、研究データ公開基盤と研究データ検索基盤については、それぞれJAIR CloudやCiNiiなど、すでに代用できるシステムがあるとのことですが、研究データ管理基盤については、現状まだ核となるものが出来ていないため、Open Science Frameworkをベースに新規開発するべく動き始めているとのことでした。

最後に、今後の課題として、キラーユー

ザー・キラーコミュニティをどう見つけるか、データの完全性の保証をどうするかといった問題があげられました。

〔講演2〕

『今なぜ人文社会系でオープンサイエンスが必要とされているのか～再現可能性問題を巡る世界の動き』

竹澤 正哲 氏

(北海道大学大学院文学研究科)



竹澤氏の講演では、2006年の有名社会心理学者による大規模データ捏造事件を契機として、社会心理学分野における再現可能性問題が明らかになり、オープンサイエンスが必要となってきたという事例について述べられました。

再現可能性問題とは、権威ある学術雑誌に載った論文や、教科書に載るような有名な研究成果でも、追試を行うと結果を再現できない事例が相次いだ、という問題です。この問題により、心理学に対する信頼性が揺らぐことに危機感を覚えた若手研究者達の間で、実験データの公開に関する意識が高まりました。また、学術雑誌についても、これまでと異なり、主要な部分だけでなく行ったことはすべて報告し、判断はeditorや読者に委ねるという方針に変化したところがあるとのことでした。

会場からの質問で、心理学分野の若手研究者がデータ共有に真摯に取り組む事例が多いのは何故かという話になった際、竹澤氏が、高尚な理由よりも、例えば親から「心理学なんてやって大丈夫なの？」などと言われるのが嫌だといった、もっと研究者により身近な動機によるのでは、という話をされ、会場が笑いに包まれる場面もありました。

〔講演3〕

『大学がオープンサイエンスに向き合うために必要な背景と要素とは：学術情報流通の変革と、研究・研究評価の新しい展開』

林 和弘 氏

(科学技術・学術政策研究所)

林氏の講演では、オープンサイエンスが生まれた背景や、その流れに伴う研究・研究評価の変化についての説明と、図書館が担うべき役割について提案がなされました。

オープンサイエンスをムーブメントとして捉え、新しい枠組み作りの時期と考えると、図書館は研究者とどうパートナーになっていくか考える必要があるとの考えが示されました。データが膨大で1人で研究するには手に余るような研究を行っていたり、多くの人が利用したいが、機器数が限られているような研究、人のDNAなどのユニークデータを扱う研究など、必要なところにおいてはすでにオープンサイエンスが進んでいるので、例えば終了した研究のデータを扱うと研究者に喜ばれるのではないか、とのことでした。



パネルディスカッションでは、パネリストが「オープンサイエンスの基盤については、大学には余計なことはしてほしくない（自由度の高いシステムでなければ利用率が低いと思う）」、「世代交代が進めばオープンサイエンスは進む（若手研究者の研究を否定せずに、まずは自由にやらせてあげてほしい）」など、わざと過激(?)な発言をしていたため、笑いの絶えないワークショップでした。

(DRF企画WG 北海道大学 近藤 絵理子)

[レポート] 第3回SPARC Japanセミナー2016

科学的知識創成の新たな標準基盤へ向けて：オープンサイエンス再考

日 時：平成29年2月14日（火）会 場：国立情報学研究所

平成29年2月14日（火）、第3回SPARC Japanセミナー2016が開催されました。今年度のSPARC Japanセミナーの最後を飾る今回も、オープンサイエンス・学術情報流通の現状と今後の展望について、内容の濃い講演・ディスカッションが行われました。

Open Science in a European Perspective

—Ron Dekker氏（European Commission
（DG Research & Innovation））



Ron Dekker氏講演（Photo by：NII）

前半はECにおけるオープンサイエンスの政策と現状について。政策は期限を明示すること、野心的な目標を設定することが大事だと強調されていたのが印象的でした。後半は学術情報流通の今後の展望についてWellcome Open Researchの事例などを紹介され、査読の形の変化や、プレプリントが成果として認められはじめている状況をお話しされました。

ディープラーニングとオープンサイエンス

—北本 朝展氏（国立情報学研究所）

前半はオープンサイエンスのさまざまな側面について紹介され、ライブラリアンの役割が大きく変わっていくことも示唆されました。後半はarXivを舞台としたディープラーニング研究の爆速化の事例紹介がありました。arXivの前日の投稿を引用するケースや、プレプリント段階で終わる研究が出てきている状況を挙げて、査読や出版のシステムが大きく変わる可能性を示唆されました。

JSTにおけるオープンサイエンスへの対応

—小賀坂 康志 氏（科学技術振興機構）

JSTの一部のファンディング事業で提出が義務付けられた、データマネジメントプラン（DMP）について事例紹介されました。

データ公開については採択課題の半数程度が限定的公開（同じ領域内の研究者への提供等）で、無条件公開が1/4、非公開が1/4程度だったとのこと。また保存場所は研究室の自前サーバが約半数であり、機関リポジトリなどは少数だったそうです。DMPの作成は順調で、JSTのプロジェクト担当者が記入のサポートを行っていることも紹介されました。

材料科学分野におけるデータ利用のライセンスの考え方

—小野寺 千栄 氏（物質・材料研究機構）

前半では、セミナー「オープンサイエンスと著作権」の内容が紹介され、データは著作物ではないので、利用については契約で規定する必要があることが示されました。後半では、物質・材料研究機構における研究データの利用や提供の事例を紹介され、今後各機関で公開・提供を進めていく際に検討すべきさまざまな点が示されました。



パネルディスカッション（Photo by：NII）

研究データ共有の理想と現実、そして実践可能性

—小野 雅史 氏（東京大学地球観測データ統合連携研究機構）

地球環境分野の研究データ共有基盤DIASの概要と、その利用者へのデータ共有の意識調査事例について紹介されました。オープンサイエンスにはデータ共有とデータ公開のどちらのパターンもあること、研究の深化という観点ではデータ共有のほうがオープン化へのインセンティブの大きい手法になりうることを示唆されました。

一大向 一輝氏 (国立情報学研究所)
一田村 峻一氏 (滋賀医科大学附属図書館)
一梶原 茂寿氏 (北海道大学附属図書館)

「研究データを用いたサービスの調査・企画」がテーマの平成28年度学術情報システム総合ワークショップの2班の成果が紹介されました。A班の田村氏からは所属機関内のさまざまな部署やプロジェクトなどで分散してしまっている研究情報の集約化・簡便化を図るシステムの構想が示されました。B班の梶原氏からはデータを使う側の視点から、ゲーミフィケーションなどの機能を備えてライトユーザーにも継続的に使ってもらえる、オープンデータのワンストップポータルの構想が示されました。



パネルディスカッション 全体風景 (Photo by : NII)

一尾城 孝一氏 (東京大学附属図書館)

機関リポジトリ推進委員会研究データスク
フォースが作成中の、研究データ管理
(RDM)の日本語版教材について紹介されま
した。3月末にMOOCで提供開始予定とのこと
です。



パネルディスカッション モデレーター及びDekker氏
と北本先生 (Photo by : NII)

パネルディスカッション

林 和弘氏（科学技術・学術政策研究所）をモデレーターに、会場からの質問に答える形で進められました。

国のトップダウンでオープン化を強制することの是非について、国の政策として進めるならば、その結果へのフォローや評価は必ず行わないといけないだろうという指摘がありました。方法としては、JSTのDMPのように、非公開も選択できるがまずはデータの保存について考える機会を増やすという方法は有益ではないかというご意見がありました。

また、日本におけるオープンサイエンスの議論に呼び込むべきステークホルダーとして、ドメインサイエンティストや評価担当者、そして、サステナビリティを考える経済の専門家や、利用規約を検討する法律の専門家がいるという指摘がありました。

会場も交えて、オープンマインドを持つ学部生・院生や若手研究者といった層に、実際にデータを使ってもらふことや、研究に必要なデータを集める・登録ということに参画してもらふというのがよいのではというご指摘もありました。

[illegible]

第3回SPARC Japanセミナー2016

発表資料をウェブで公開中！

詳しくはSPARC Japan ホームページにて！

SPARC Japan

<http://www.nii.ac.jp/sparc/>



Photo by: JPCOAR

REPORT:

オープンアクセスリポジトリ推進協会 JPCOAR 第1回総会

国内のオープンアクセス・機関リポジトリコミュニティの新たな形として、平成28年7月に設立されたオープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）。このたび、その第1回総会が開催されました。この総会は、JPCOAR会員機関だけが参加する、JPCOAR全体の意思決定の場ですが、同時に年度中の、オープンアクセスに関する様々な活動の報告もなされます。その様子を、JPCOAR広報作業部会よりご報告いただきました。

去る3月8日（水）、学術総合センター中会議場において、JPCOAR第1回総会が開催されました。当日は、会員機関444機関（当時点）のうち118機関より代表者・陪席者が参集（240機関が委任状提出）し、協会運営に係る様々の議事について協議を行いました。

今回のレポートでは、今年度のJPCOARの活動状況について示された入会状況報告・2016年度機関リポジトリ推進委員会作業部会・タスクフォース（TF）の活動報告を中心にご報告します。

● 入会状況について

細川聖二氏（国立情報学研究所）より、国内機関のJPCOAR入会状況の報告がなされました。

前述のとおり、総会時点での会員機関数は444機関で、細川氏の報告ではその内訳などが示されました。会員機関のリポジトリ構築システムについては、独自構築機関が会員機関の約15%、JAIRO Cloud（JC）利用機関が約85%とのことでした。国内全体では約45%が独自構

築であるため、それらの機関へ重点的な参加勧誘を行っていきたくとされました。また、会員機関の構成員数について、比較的に数の少ない小規模な機関が多く、構成員数が増えるにつれ割合が逡減するとのことでした。まだ参加していない機関にも大規模な機関は少なくないため、独自構築機関と併せて勧誘活動を行うとされました。

報告は、各地域の協議会など既存のつながりを活用した参加勧誘をお願いしたい、という会員機関へ向けた呼びかけで締め括られました。本稿をご覧の皆様の中にも、まだ参加されていない機関の方がいらっしゃいましたら、ぜひ参加をご検討ください！

● 2016年度の機関リポジトリ推進委員会作業部会及びタスクフォース活動報告について

尾城孝一氏（東京大学）より、今年度JPCOARの活動・運営を担った機関リポジトリ推進委員会の作業部会・タスクフォースの活動報告がなされました。

■ JAIRO Cloud運用作業部会

既構築機関のJC移行サポートに注力し、試行的に移行勉強会も実施しました。ご好評にお応えして来年度も継続開催し、また資料や移行FAQを公開する見込みです。その他、JC掲示板サポートやJCのソフトウェアWEKOの機能改善のための検討も行いました。

■ 広報作業部会

Webサイト・Facebook等での広報の他、図書館総合展フォーラムや地域ワークショップなどのイベントも企画実施しました。また、国際協力のための人材派遣・招致も行いました。

■ 研修作業部会

研修作業部会は、今年度中に5回実施した新任担当者研修を担当しました。みなさまの機関にも受講された方がいらっしゃるのではないのでしょうか。新任担当者研修は、来年度も同程度の開催が見込まれています。

■ 研究データタスクフォース

研究データ管理（RDM）のトレーニングツールの開発を進めました。報告では、リポジトリ等担当者だけでなく、URA等の研究支援スタッフや研究者自身も対象としたツールとなっていると言及されました。近日中のMOOC化完了を目指しておりますので、公開された際にはぜひ、ご活用ください。

■ 論文OAタスクフォース

JPCOAR Webサイトにて公開された「オープンアクセス方針策定ガイド¹」と「オープンアクセス方針リンク集²」を作成し、方針策定を支援すると同時に、実施支援、実施結果の評価・トラッキングにも取り組みました。

1 <http://id.nii.ac.jp/1458/00000021/>

2 https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/?page_id=53

■ メタデータ検討タスクフォース

junii2に替わる新たなメタデータスキーマ「JPCOARスキーマ」の策定に取り組みました。現在、スキーマ案を公開し、意見募集を実施しております³（3月24日（金）締切）。皆様からの忌憚のないご意見をお寄せください。

3 https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/?page_id=54

■ 指標・評価・メトリックタスクフォース

IRDBコンテンツランキングの作成や、IRDBのアクセス統計提供サービスの検討を行いました。また、JAIRO Cloudのアクセスログ解析とそのフィードバックなども検討しています。

■ ORCIDタスクフォース

今回初めて報告された、新たな取り組みがORCID TFです。著者識別子ORCIDの国内コンソーシアム創設に向け、情報収集等の作業に取り組んでいます。

■ COAR Asiaタスクフォース

アジアでのOAコミュニティ立ち上げに向け、2016年3月にキックオフ会議を実施、11月に第1回会議を開催し、アジア8カ国から120名弱の参加がありました。今年秋には第2回会議の開催も予定されています。

報告の最後には、今年度の活動全体を振り返り、JPCOARとして統合された来年度以降の活動に繋げていきたいと語られました。各活動成果等は、機関リポジトリ推進委員会およびJPCOARそれぞれのWebサイト^{4,5}にて公開中・公開予定です。JPCOARは来年度も、これらの活動を引き継ぎつつ更なる発展を目指して邁進してまいります。今後もJPCOARの活動にご期待ください！

4 <https://ir-suishin.repo.nii.ac.jp/>

5 <https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/>

（寄稿 JPCOAR 広報作業部会）

特 報

今夏、JPCOARより新情報誌創刊

設立総会、第1回総会を終え、平成29年度より本格的な活動を開始するJPCOAR。その活動のひとつとして、この夏、学術情報流通の現在と未来を考える、新たなオープンアクセス情報誌を創刊します！ JPCOARの最新情報はもちろんのこと、機関リポジトリ、オープンアクセス、オープンサイエンスをはじめとした、今般の学術情報流通を巡る様々な動向を、ボリュームたっぷりにお伝えします。刊行の詳細は追ってJPCOAR Webサイト等でお知らせしますので、続報をお待ちください！

今そこにあるオープンアクセス 第22回 (最終回)

ハゲタカ出版社リストの消滅

Disappearance of the list of predatory publishers

1 月も半ばを過ぎた頃、ジェフリー・ビール(Jeffrey Beall)のハゲタカ出版社リストがアクセスできなくなっているという情報¹が伝わった。日本でもカレントアウェアネス²が取り上げ、彼のブログ³のコンテンツが何の説明もなくすべて削除されていること、勤務先のコロラド大学デンバー校から、これはビール自身が行ったことで、彼の地位はそのままであるという発表があったこと、キャベルズ(Cabell's International)という会社が彼を顧問に迎えて同様のブラックリストを作る予定だったこと、などを紹介している。

恨みを買うことも多い(2013年にはインドの出版社から10億ドルの損害賠償請求を受けたと報じられたこともある)リストだったので、ハッキングされたとか脅迫を受けたとかの憶測を呼んだ。利用者の間ではキャッシュされたリストがツイッターで出回ったらしい。インターネット・アーカイブで直前の版⁴が見られるという指摘⁵もあった。

価値あるサービスだから復活してほしいという声⁶がある一方、冷ややかな反応も多い。リストが個人的な判断によるもので基準が疑わしいということもあるが、オープンアクセス(OA)をヨーロッパの社会主義者の陰謀だと言ったり、OA運動を攻撃する論文⁷を発表したりして顰蹙を買ったことが大きい。古からのOA擁護者ゲドン(Jean-Claude Guéron)などは「いずれにせよビールのリストは役に立たない。誰が気にするんだ?」と切って捨てる。

ブラックリストという形式そのものが良くないという意見⁸もある。差別的で訴訟を受けやすく、本質的に非倫理的だと言う。この人はホワイトリストの利用を推奨し、パブメド、ウェブ・オブ・サイエンス、スコパス、DOAJなど、すでに多くの立派なホワイト

リストが存在すると指摘する。ThinkCheckSubmit⁹(考えよ、チェックせよ、投稿せよ)やQOAM¹⁰のようなサービス(前者は投稿先を考える上でのチェックリスト、後者はクラウド・ソーシングによる学術雑誌の評価リスト)を使う手もあるが、結局のところ、研究者は自分で投稿先を決定できる能力を持たなければならない、というのが結論である。

ビール自身は沈黙を守っているのだが、彼に接触し、フェイスブックのチャットでインタビューした人¹¹がいる。それによると、キャベルズから正式な話はないし金も受け取っていないと言う。ブログ削除の理由を明かすのは丁重に拒否したが、このままだと彼の仕事は無駄になってしまうのではないかというコメントには、OA擁護者たちは常に自分を批判し続けてきた、彼らが問題を解決するんじゃないか、と拗ねたような返事をしたそうである。

ところで、この連載も今回で終わりだが、最初の回(2013年7月の月刊DRF42号)で取り上げたトピックがこのハゲタカ出版社リストだった。当時はBeallの発音がわからず、誤ってベルなどと表記している(名前発音サイトで調べた結果)。3年半ほどかけて同じ場所に戻ってきたような既視感を覚えるが、まったくの円ではなく螺旋を描いたのであって、ほんの少しだけかもしれないが、OA運動は着実に上を向いて進んでいるのだと信じたい。

この間のご愛読を感謝いたします。



栗山 正光

首都大学東京 学術情報基盤センター教授
デジタルリポジトリ連合 アドバイザー
【Researchmap】<http://researchmap.jp/read0195462>

お知らせ

DRF解散に伴い、月刊DRFも終刊いたします。
ご愛読、ありがとうございました。
なお、特別号として「さよならDRF号」を発行予定です。
そちらもぜひご覧ください。



読者アンケートにご協力ください。

http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html



<https://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>

月刊DRFでは、みなさまからのお便りを
お待ちしております。 gekkandrf@gmail.com

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/>

月刊DRF第86号 平成29年3月22日発行 デジタルリポジトリ連合

